人と自然と文化にやさしい地域づくり

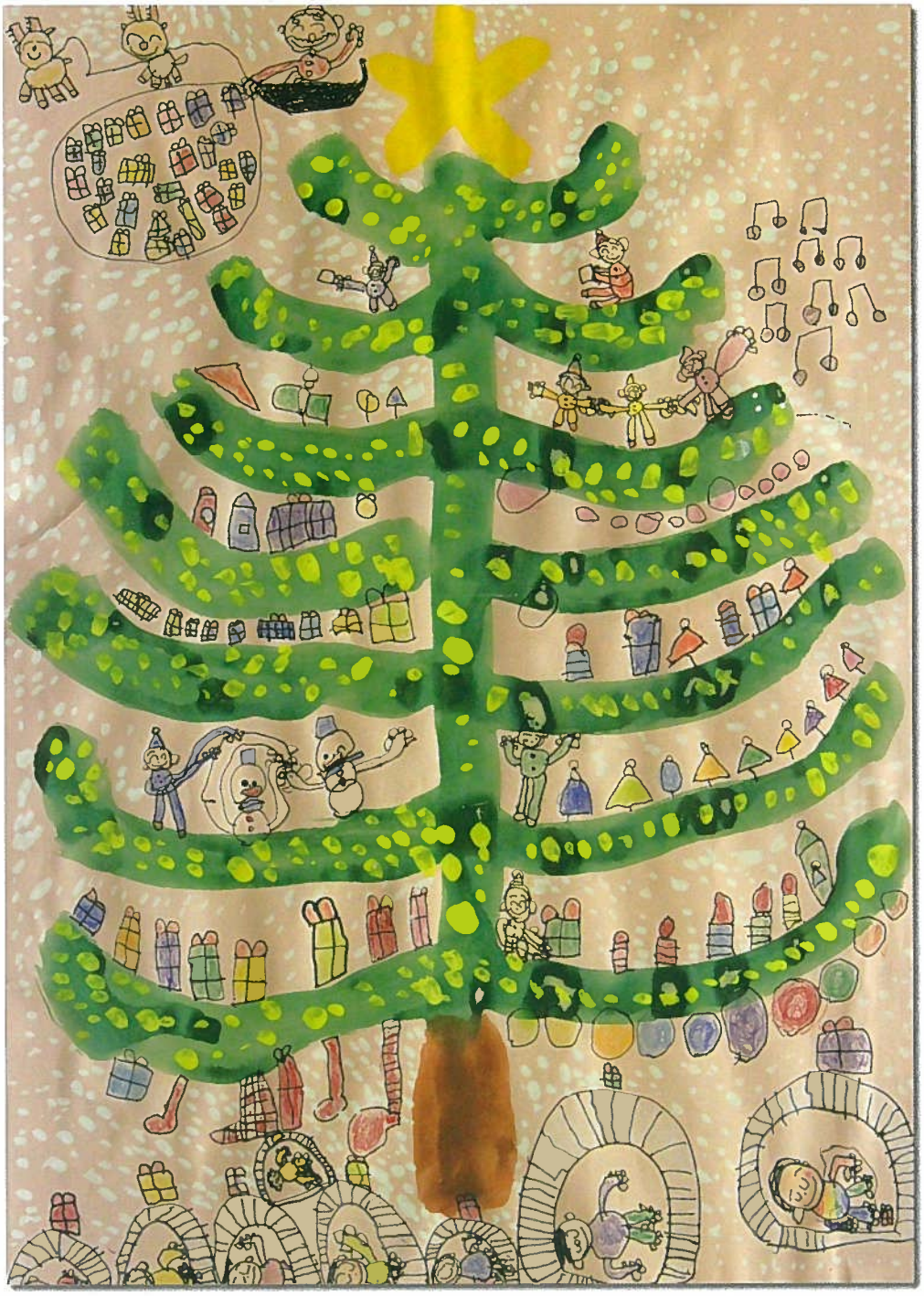
平成30年　No.1282

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

12

明日を拓く ― 豊かな実践に高める ―



平成29年度　第70回山口県学校美術展　推奨作品
「たのしいクリスマスツリー」
田布施町立城南保育園年長（受賞時）　兵頭　翠斗

■シリーズ「つながる ②」

■まちおこしでつながる
山口県立豊北・下関北高等学校
校長　竹村　和之
山口県立下関北高等学校　1年　清水麻衣子
山口県立豊北・下関北高等学校
北高夢ロード実行委員会会長　岡崎新太郎

■伝統文化でつながる
山口市立八坂小学校　校長　山本　浩之
月性展示館　館長　西原　光治

■本でつながる
宇部市立西岐波小学校
おはなしの会「もこもこ」　代表　松尾　京子
下関ブックトーク研究会
会長　前田真奈美

■音でつながる
ミモザの会（周防大島町）　大川　幸枝
下関市立吉田小学校　教諭　常重　尚志

■やまぐち見てある記
十朋亭維新館
宇部ときわ公園　石炭記念館

■教職時代を偲ぶ
下関支部　池内　賢二

あなたのアクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち

一般財団法人　山口県教育会

〒753-0072　山口市大手町２－18　TEL 083-922-0383　FAX 083-922-5768
URL http://www.ykyoikuk.or.jp　E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp
明治36年4月第１号　毎月１日発行　発行人　会長：倉増誠彦／編集長：山本晃久

「まちづくり」で地域とつながる

山口県立豊北・下関北高等学校
校長　竹村和之

少子化・人口減少が進む地域に、再編統合により今春開校

本州の西端、夕陽に映えて海上に伸びる角島大橋など豊かな自然や観光資源に恵まれる一方で、少子・高齢化、人口減少・人口流出、これに伴う地域の活力低下が深刻な課題となっている下関市豊北町にある本校は、県立響高校と再編統合して開校した下関北高校の一年生と、豊北高校二、三年生が学ぶ全校生徒百七十人の学校です。

地域と学校の課題が直結

再編統合により、地域唯一の県立高校となった本校は、生徒の幅広い学力や多様な進路希望に的確に対応することに併せ、「地域社会の維持・発展に貢献できる人材の育成」「高校生ができる地域貢献による地域の活性化」といった社会的な使命・責任を有しています。

高校が有する「社会的使命＝地域とつながる」ことの必要性

そもそも、その地域に必要だから、必要な種類の高校が設置されていることを考えれば、高校には、生徒一人ひとりの自己実現といった教育的使命とともに、例えば、専門高校であれば、商業、工業、農業を担う人材の育成など、地域それぞれの課題に応じた社会的使命があり、高校が地域とつながり地域について学ぶことは必然です。

また、進路決定期であり、社会に出る一歩手前の高校生が、地域社会とつながっていなければ、小中学校で学び積み上げてきた社会とのつながりの連続性が薄れ、その意義が損なわれてしまいます。

このほか、高校生が、社会（地域）を舞台に活躍することにより、例えば、多様な大人との交流を通して人間的・社会的に成長したり、将来に見通しをもったり、さらには、地域やそこに住む人のよさを実感することを通して、人口定住・還流につながることも期待できます。

高校生が取り組む「我がまちの活性化」

「地域とつながりたい」という学校の姿勢を様々な場面で明確に示すことにより、多くの地域の人材や組織から学校に声がかかるようになりました。

地元で頑張っている自分たちのことを知って欲しいと商工会青年部の申し出により、地域の若手経営者と開催した交流会や、彼らが（商工会青年部）が主催する地域行事（夏の夜市）に高校生がボランティアとして参加し、年齢が少し上の先輩方が活躍している姿にふれた経験は、地域のことを意識し、肯定的にとらえ、自分に何ができるか考えるきっかけとなったようです。

「高校生の豊かな発想を」と声がかかり参加したまちづくり協議会のワークショップでの提案をもとに、今年度、新たに取り組んでいるのが、地元の花卉農家の方と、豊北町をハロウィンかぼちゃの一大産地にしようという取組です。山口県教育会の地域活性化活動奨励事業のご支援をいただきながら取り組んでいるこの活動を通して、下関農林事務所や観光協会など、行政機関や民間団体ともつながり、それらの人材、組織は今や学校の大きな支援団体となっています。

また、同窓生を中心とする学校支援団体「北高夢ロード実行委員会」とは、通学路途中にある商店街の空き店舗を利用して小さな美術館「ギャラリー夢ロード」を開設し、定期的に美術展を開催しています。

学校の元気が地域の元気につながる

小中学校のコミュニティ・スクール設置率百パーセントの山口県では、高校が地域貢献活動に取り組むことにより、大きな効果が期待できます。地域に支えられて成長してきた子どもたちが、地域に恩返しすることになり、その若い力は、地域活性化の大きなエネルギーとなります。引き続き、高校がまちづくりの推進力となるよう、高校生と学校の元気を地域にお届けしたいと考えています。

シリーズ「つながる ②」

ハロウインかぼちゃで町おこし

山口県立下関北高等学校
一年　清水　麻衣子

今では日本でも有名なイベントの一つ、ハロウィン。幼い頃、仮装した子どもたちが、大きな棒付きキャンディーを大人から貰う洋画のワンシーンを見て、羨ましく思ったのを今でも覚えています。

私の好奇心をくすぐったハロウィンの世界観を体感する活動を通して、まちを元気にしようと、豊北・下関北高校の高校生が地域の方々と一緒に取り組んでいます。

かぼちゃのランタンづくりなどのイベントを観光施設等で展開し、観光客の増加だけでなく、生産振興にもつなげ、豊北をハロウィンかぼちゃの一大産地にしようというこの取組の最終目標は、角島大橋のランタンでのライトアップです。なんて大きくて素敵な夢でしょう。

私たちの高校では、これまで、かぼちゃの栽培、ランタンづくり、大正時代の面影を残す文化財「太翔館」のライトアップなどに取り組んできました。

先日は、道の駅「北浦街道ほうほく」で、私たち高校生が仮装して、ランタンづくりのコンテストを開催しました。また、この取組を通して生まれたアイデアを山口県高校生県議会で提案したり、政策アイデアコンテストに応募したりしています。

私達高校生にいったい、どれだけのことができるでしょうか。高校生だからこそ、夢を大きく描くことができ、若者の発想力・行動力と地域の包容力がきっと、まちを元気にしていきます。

色々な人と出会い、話し、地域の魅力を伝えるそんな体験ができるこの学校の三年間にワクワクしています。

通学の街のよみがえりを目指して

山口県立豊北・下関北高等学校支援団体
北高夢ロード実行委員会
会長　岡崎　新太郎
（同学校運営協議会会長）

かつて、私たちが将来の夢を語りあいながら通学した通学路（北高夢ロード）も、今では、多くの店がシャッターを閉じ、高齢化率五十一パーセントの豊北町の中心地滝部では、豊北・下関北高校に通学する高校生の清々しい挨拶と風に乗り聞こえてくる部活動の掛け声が街に元気を与えてくれています。

北高夢ロード実行委員会とは、豊北高校の卒業生を中心に構成する高校を支援する地域の人々の集まりです。

夕立のなか、濡れて下校する豊北高校の女子生徒に傘を持たせたところ、翌朝返された傘に「ありがとうございました」と丁寧なメモが。この六年前の小さな体験が、商店店頭に置いた無料貸傘という形での通学支援の始まりで、現在の活動の原点となりました。

以来、粟野川の蛍の見学会や北高卒業生の著作物等の市立図書館や学校の図書室への展示（先輩の本棚）、同窓生と高校生が一緒になったまち歩きなど、世代を超えた様々な取組を高校と行ってきました。

そして、今年は、同窓生と高校生が一緒になった町おこしの取組へと活動を充実させています。「地元の高校のためなら」と提供してくださった空き店舗をお借りしたミニ美術館「ギャラリー夢ロード」の取組です。第一回展覧会では、展示された絵画について高校生と地域の方々が感想を述べ合ったり、高校生が持参したデッサン画を地元の芸術家の方に見てもらったりと、楽しい時間を過ごしました。

秘密基地のような空間を、これから、地域と高校生の交流の場として、盛り上げていく予定です。

学校の課題は、今や学校の課題だけでなく地域の課題です。これからも、同窓生の枠を超え、より多くの地域の方々も巻き込みながら、課題を共有し、学校を支援していきます。

シリーズ「つながる②」

ふるさと大好き ～重源太鼓でつながって～

山口市立八坂小学校
校長　山本　浩之

本校は、佐波川中流、徳地地区の中央部に位置しています。緑豊かな自然の中で、子どもたちは伸び伸びと元気に生活しています。

重源太鼓は、昭和六十一年徳地青年団の「樽太鼓」を引谷小が引き継ぎ、青年団の方の指導を受けたのが始まりです。その後、平成十五年の学校統合により八坂小に受け継がれ、今年で十六年目を迎えています。

太鼓の素朴な響きは、鎌倉時代の僧「重源上人」が奈良東大寺を再建するにあたり、徳地の地より木を切り出したという言い伝えをもとに、「そま取りの音」や佐波川の「せせらぎの音」をイメージして作られています。今年は三～六年生の児童二十八名がクラブ活動として練習に取り組み、その成果を披露しています。　地域では「重源太鼓の演奏」は恒例行事となっており、多くの地域の方々に応援していただいています。また、太鼓の運搬等の準備についても保存会を始め、地域の方々にご協力をいただいているところです。重源太鼓の活動によって、子ども、保護者、教職員、地域住民がふれあい、つながる場ができているように感じています。

しかし、一方で課題もあります。例えば、児童数が減っていることや八坂地域に指導者がいないことです。現在活動している小学生や先輩の中高生の中から将来の演奏者や指導者が育っていくようなかかわりやつながりを作っていかなければなりません。

今年は旧引谷小を訪問して、六年生による小編成の演奏を行うことを計画しています。かつて重源太鼓の継承に力を注がれた引谷地域の皆様に太鼓の演奏を届けることで、人や地域のつながりがさらに深まり広がっていくことを期待しています。

「ふるさと大好き、夢いっぱい、チャレンジいっぱいの楽しい学校～つながって～」が本校の合い言葉です。

愛・夢・志をはぐくむ伝承活動

月性展示館
館長　西原　光治

長州は明治維新の胎動の地である。そのルーツは柳井市の僧月性にあると言っても過言でない。維新のトリガーとなって国事に奔走した月性は、思想面での先覚者であり、優れた詩人（漢詩）であり、偉大な教育者であった。

吉田松陰が、リスペクトし留魂録や書簡で月性の志を教示している。「男児志を立てて郷関を出づ……人間到るところ青山あり」このフレーズは、月性の立志の詩で強い決意と高い志を表している。その「詩」は民衆の心を揺さぶり、その「志」は武士の魂を突き動かした。この詩を基に月性の剣舞が創作され、三十数年継承されて来た経緯がある。

そのような中、山口きらら博（二〇〇一年）の出演がきっかけとなって「月性剣舞保存会」が発足した。以後、柳井市遠崎地区において、子どもたちに月性の功績、略伝を解説し、月性剣舞の意味を理解させたうえで実技指導を行い、剣舞の実技と精神の伝承活動に邁進している。

その成果を地域の行事やイベントで発表する機会をいただくとともに、地元の大畠小学校、大畠中学校では運動会や立志式において朗誦や剣舞を取り入れるなどを通して、教育のまちづくりが推進されている。

指導の中で礼儀作法の基本を身につけさせ、豊かな人間性を養い、健全な精神が育まれるよう努めているが、最終的には、子どもたち自身が生まれ育った地域への関心を高め、自発的に後継者に名乗りを上げてくれるような人材に育ってほしいと願っている。

柳井市では、教育ビジョン「志の教育」が推進されており、コミュニティ・スクールの更なる充実発展のためにも市内全ての学校に立志の詩の朗誦と剣舞を拡充し、教育の活性化に寄与したい。月性の志とエネルギッシュなDNAを継承し、地域の繁栄に奔走したいと思慮する。

本でつながる

絵本が導く三つの「つながる」

宇部市立西岐波小学校
おはなしの会「もこもこ」
代表　松尾　京子

おはなしの会「もこもこ」（以下、もこもこ）の代表をするようになって、私は三つの「つながる」を感じています。

まず一つ目は、「私と会員とのつながる」です。私がもこもこに入会したのは今から六年前です。入会して二年目で代表を引き受けたため、会や会員のことがよく分かりませんでした。担当やお知らせの連絡を取り合う中で、会員のことや温かい人柄が分かるようになり、関係が深まっていきました。結果、全会員と私の「つながる」を感じることができるようになりました。

二つ目は、「会員と絵本好きな人がつながる」です。私達は、会員が紹介してくれる講演会や勉強会に、積極的に参加しています。単に講演を聞いたり勉強をしたりするだけでなく、講師などで参加した絵本が好きな人たちと「つながる」ことができています。絵本を通じて、会員以外の人たちとつながっていける。こういうところでも絵本の素晴らしさを感じています。

三つ目は、「学校や地域とつながる」です。西岐波小学校では、毎年十月に「わくわく祭り」という文化祭を行っています。また、昨年からは、夏休みに学校図書館の地域開放も実施しています。もこもこはこれらの行事にも参加しています。ことし初めての試みで、西岐波中学校三年生の家庭科の授業で読み聞かせをしました。このような活動を通して、学校や地域との「つながる」を感じています。絵本を通じてこのような素敵な「つながる」を感じることができました。会の代表は大変な役目ですが、務めて本当に良かったと思います。これからも「つながる」ことを大切に、もこもこの活動を充実させていきたいと思います。

伝えよう広げよう読書の喜びを

下関ブックトーク研究会
会長　前田　真奈美

下関ブックトーク研究会は平成十二年十一月に発足。小学校の教員五人でスタートしました。

児童の読書離れが進む中、「学級の子どもたちが少しでも本に目をむけるように。本を手に取るように」との願いのもと、二か月に一回、読書好きな仲間が集まって、情報交換をしながら、ブックトークの実践研究を行ってきました。

気がつけば十八年。今ではメンバーは二十人を超え、教職員だけでなく、学校司書、読み聞かせボランティアの方など、仲間の輪も広がっています。また、下関市の児童図書専門店「こどもの広場」の横山眞佐子さんや、児童文学作家の村中李衣さん、山陽小野田市立図書館館長の山本安彦さんといった本のスペシャリストとも交流を続け、様々な場面でアドバイスをいただき、研修を深めています。

いつのまにか、研修内容もブックトークにとどまらず、読書イベントへの参加、読書感想文講座や読み聞かせ会の実施など、地域貢献に関わることを含めて、多岐にわたるようになりました。

今年度は国際アンデルセン賞を受賞した角野栄子さんの記念講演会のスタッフを務めたり、ビブリオバトルを開催したりと、ますます活動の場は広がりを見せています。

「子どもたちに読書の喜びを伝えたい。そのためには、まず自分たち自身が、その喜びを知ることが大切だね。何より、こうした思いを自由に語り合える仲間がいることが、一番素敵だね」。最近、会員同士でよくそんな話題が出ます。職種も、年齢も様々な会員ですが、本がつないだ「縁」を大切に、これからも活動を続けていきたいと思います。

シリーズ「つながる②」

地域は大家族

ミモザの会（周防大島町）
大川　幸枝

教会の会堂に、歌声が流れています。体を揺らしながら歌っている小学生。動き回る小さな子どもさんを気にかけながら歌うお母さん。おじいちゃん園長先生のひざの上にだっこされた幼な子。美しい高音を響かせている女子中学生。楽しそうに歌っているのは九十代のおばあちゃん。

ここでみんなが歌っているのは、「浜辺の歌」や「かもめの水兵さん」「雨降りお月」など、大人にとっては懐かしい曲。子どもたちにとっては、聞いたことはあるけれど、あまり歌ったことはないというような童謡や唱歌です。この、三世代四世代がつどっている光景は、まるで大家族のようです。そういう姿を思い描きながら始めた「ミモザの会」。まだ日は浅いのですが、ここには、私が願う人々の姿があります。

「今日も、癒やされに来ました」。

「子どもを寝かしつける時の歌のレパートリーを広げようと思ってきました」。

「童謡が大好きだから、ここに来るのが楽しみなんですよ」。

「親子で歌えるのがうれしいです」。「次は、この歌を歌いたいです」。

このように、一人ひとりの思いこそ異なりますが、毎回三十人前後の方がつどい、穏やかな時が流れる場になっています。

「赤ちゃんから高齢者までがつどい、日本の心がこめられた美しい歌を子どもたちにも伝えたい。子育ての話も交えながら、世代を超えたつながりをつくり、地域ぐるみで子どもの成長を見つめていきたい」。そういう願いを胸に、毎回、会堂に流れる歌声を聞いています。教会の入り口に立つ、大きなミモザの木に見守られながら。

初コンサート

下関市立吉田小学校
教諭　常重　尚志

本校の金管バンドは昭和五十六年にトランペット及びドラムを揃えてスタートした。平成二十五年度からは指導者であるバンドマスターに、地域在住の元小学校教員を招聘し、毎週火曜日と金曜日の放課後三十分間を使って活動している。現在は楽器の種類が増えて、トランペット・ユーフォニウム・アルトホルン・ドラム・バスキー等を四年生以上の希望者十八名が担当している。

校外での主な演奏活動は七月に開催される吉田川祭り（よしだ・かわまつり）十月の吉田楽市（よしだ・らくいち）十一月の吉田地区文化祭である。いずれの行事も特設ステージが設営され、その晴れやかな舞台で演奏をする児童らはとても輝いて見える。

なかでも、七月の吉田川まつりでは保存会による平家太鼓の演奏、近隣の中学校の吹奏楽演奏、こども園の園児による舞踊「花の奇兵隊」とともに本校金管バンドの演奏は祭りを盛り上げており、花火見物や灯篭流しに訪れる多くの地域の方々に大きな声援をいただいている。

吉田川祭りは四月に新しいメンバー構成になって初めての舞台であるとともに新しく取り組んだ曲を披露する機会なので、児童たちは大変な緊張を強いられている。

一曲の演奏が終わるたびに送られる地域の大きな声援のおかげで、膝を震わせながらの初演奏を今年もやり遂げることができた。誇らしげな児童の表情と惜しみなく送られる拍手に、言葉では表現できない地域との心のつながりを感じた。

また、児童数は年々減少しているが金管バンドの継続は吉田地区に生活する一員であるという児童の自覚を高めるとともに地域の活性の一助になっていると改めて認識させられた。

山口県内の博物館や美術館を、取材を通して紹介します。

やまぐち見てある記

十朋亭維新館

毎年開催される「アートふる山口」において、多くの来場者でにぎわいを見せる竪小路筋中程の道路沿いに、「十朋亭（じっぽうてい）維新館」が平成30年９月29日にオープンしました。

十朋亭は、近世後期から山口町の下竪小路で醤油醸造業を営んでいた萬代家の離れとして建てられました。ときの藩主毛利慶親（のちの敬親）により藩庁が萩城から山口中河原の御茶屋に移されてからは、藩主係累や家臣団の、いわゆる「御用宿」のひとつとして機能していました。1864年、英・仏・蘭・米４か国連合艦隊による下関攻撃が企画された際、これを止めるために急遽英国から帰国した井上馨、伊藤博文がこの十朋亭を借りて居住したと言われています。幕末、明治維新に、多くの藩士や志士たちが訪れているとの来歴が評価され、昭和57年、山口市指定文化財（史跡）となりました。

十朋亭には明治維新後吉田松陰の兄、杉民治が居住しており、杉民治は明治初期に隣の建物で私塾を開いたとされており、杉私塾の建物も大切に保存されています。

また、同じ敷地内には、明治20年頃竪小路を挟んだ西向かいに離れの茶室として建てられ、その後移築、二階や玄関が増築されて現在の建物となった萬代家主屋も保存されています。南に面する庭は、見どころの一つです。

これらの建物は、萬代家から寄贈を受けた山口市により、十朋亭維新館として改修整備されました。

新しく整備された本館の建物には十朋亭ゆかりの志士にちなんだ資料があるほか、現在の山口市の中心を模したジオラマへのプロジェクションマッピングにより、明治維新の策源地として山口が果たした役割を学ぶことができるコアテーブルは、本施設の魅力の一つになっています。

さらに、スマホやタブレットに館オリジナルのアプリをダウンロードし、館内のARマークに機器をかざすと、当時の情景を楽しんだり、「やまぐち街歩き案内」で地図や観光地の解説を見たりすることもできます。こぢんまりとした維新館なのですが、ITを駆使して奥行きの深さを演出されていることに感動しました。

〒753-0034 山口市下竪小路112番地
TEL 083-902-1688　　FAX 083-920-2088
開館時間：９:00～17:00
入館料：無料　※本館展示室のみ有料
大人（高校生以上）200円
小人（小・中学生）100円
休館日：火曜日（祝日の場合は祝日でない翌日）
年末年始（12月29日～１月３日）
URL: https://jippotei-ishinkan.jp/
Facebook：https://www.facebook.com/jippotei0929/

宇部ときわ公園 石炭記念館

常盤湖を中心に、様々な施設を備えた総合公園として親しまれている「ときわ公園」。その正面ゲートをくぐると、右手に白と赤の横縞模様のタワーが目にとまります。公園内に設置されている「石炭記念館」のシンボルです。

宇部市は、かつて石炭によって栄えました。最盛期を過ぎ、昭和30年代のエネルギー革命により昭和42年を最後に市内の炭鉱はすべて閉山されました。石炭による多大な恩恵に感謝し、貴重な文献や機材を整備して石炭産業を永く後世に伝えようと、県、市および石炭関係者をはじめ、多くの市民の寄付金によって、閉山から２年後の昭和44年11月、宇部炭田発祥の地である常盤湖畔に、全国で初めての「石炭記念館」が開館されました。

施設入り口から左に進むと、まず、海底炭田の様子や坑道のしくみを、動く模型によって学ぶことができます。さらに、炭坑で活躍した様々な機械の迫力に圧倒されながら左手奥に進むと、海底炭田の坑道のつくりや採炭現場を再現したモデル坑道の入り口が表れます。リアリティーあふれる坑道内部に、採炭作業に取り組む人々の苦労と知恵が偲ばれます。

２階に昇ると、たくさんの展示コーナーが整えられており、石炭の特徴や炭坑を支えた人々の作業用具や暮らしを実物や模型で学ぶことができます。トロッコに乗って映像で学ぶ「石炭ものがたり」は、見学に来る子どもたちにとって楽しい学習アイテムになることでしょう。

また、屋外展示場には、当時使われた大型機械たちが並び、その姿は圧巻です。

タワーは、かつて宇部興産株式会社東見初炭鉱で閉山まで活躍した竪坑櫓（たてこうやぐら）を移設し、当時の面影を残しつつ展望台として生まれ変わらせてあるそうです。眼下に広がる常盤湖や宇部の町並み、瀬戸内海を一望できるほか、ときには九州、四国の山々まで望むことができ、山口宇部空港を離発着する飛行機も楽しむこともできます。

廣畑公紀学芸員さんから「宇部炭田は、海底炭田であったことから、常に水との戦いで、そこから生まれた数多くの知恵は、とりもなおさず命を守る知恵であり、その技術や精神は今の世にも息づいています」との説明を聞き、石炭記念館に収蔵されている資料の重要性を改めて感じました。

〒755-0001 宇部市大字沖宇部254 ときわ公園内
TEL 0836-31-5281
開館時間：９:30～17:00　入館料：無料
休館日：火曜日、年末年始（12/29～１/１）
URL: https://www.tokiwapark.jp/sekitan/

教職時代を偲ぶ

下関支部
池内　賢二

一　辞令は突然に

二年間の臨時採用を経て、旭村立佐々並中学校に本採用になった。その一年後、突然「へき地へ」との辞令。当時は、「若い頃に小規模校で学校全体の様子を知ってから大規模校へ」という教育委員会の方針があったと聞く。それにしても急だった。辞令交付後は、浜崎港からたばことスイカの島「相島」へ。船で一時間。花を持って出迎えてくれる生徒達。保護者に引越の荷物を耕耘機で運んで貰う。宿舎では日直の先生が昼食を作って待っていてくださり、感激。「よし、ここで頑張ろう」と思った時の生徒の一言が、今でも忘れられない。「どうせ先生も三年経ったら居らんようになるんやろ」。

二　すでに小中一貫校

職員室を挟んで右が小学校棟、左が中学校棟。校長、教頭、教務主任以外は皆二十代の若者ばかり。小規模校なので免許教科以外も担当。公務分掌では初任者も主任である。部活動は男女一つずつ。私は女子のバスケットボール部を持つことになる。前任者から「このチームは県体（山口県中学校体育大会）に行ける力を持っているからよろしく」と言われたが、バスケットは全くの素人。バスケットの経験がある小学校の先生に助けていただき、念願の県体に出場。その様子を見ていた小学生がミニバスケットボールを始め、三年目には全国大会に出場するまでになった。有り難いことに経費はすべて保護者が萩市の知り合いに寄付を呼びかけて集めてくれた。

宿舎では協同調理。当初は宿日直もあり、夜は自然と職員室に集まり、生徒の情報や指導、保護者について悩みを語り合う。小学校の複式の研究授業も観て、未知の世界に驚く。時化で島を出られない週末は酒盛りの教育談義。小中の別なく切磋琢磨した日々は、その後の私の大きな糧になった。当時、相島では、小中一貫教育がすでに実践されていたのだ。

三　離島の悩み

生徒は家の働き手。そのために里子に来た子もいた。テスト期間中、部活を中止しても家で勉強するのではなく畑や海に行かされた。高校進学の話をしても、「勉強して高校に行ったら島には帰って来ん」と、中卒で島の家業を継げば安心との考えはとても根強かった。校長の計らいでテスト中も給食を出し、午後も授業をする。夜になると「勉強しよるかぁ」と十五人の生徒の家を巡り、保護者とも進学の話をした。十三人が高校へ、その後短大や大学へ進んだ子もいたが、今、大半は島外で生活している。

四　教育とは

教育は、今日の指導が即明日に、というものではない。種まきをし、一人一人の可能性を見つけ、伸ばす。へき地であれ都市部であれ、それは全く同じである。今、スイカオーナーになって島を訪れた時、五十代になった教え子が中心となって働く姿に出会い、今更当時の指導はどうだったのかを確かめたいとは思わないが、そのようなことなど関係なく「先生、元気かね」と声をかけてくれる親や生徒がいることを有り難いと思っている。

終身会員の紹介

伊藤　瑞生　様（吉敷）

山口県教育会の助成事業

平成三十年度に実施した事業です

現職研修奨励事業

研修内容
教育に関する研修活動で、その重要性、継続性、発展性が他の参考となるもの

助成対象
学校・園…県内の学校、保育園、幼稚園、こども園
個人……教職等経験年数一年以上の個人
グループ…同一校に勤務する教職員のグループ
サークル…近隣の学校に勤務する教職員で構成したサークル

助成金額
山口県小学校教育研究会、山口県中学校教育研究会、公立学校教頭会
個人……三万円以内
学校・園、グループ、サークル……五万円以内
山口県小学校教育研究会、山口県中学校教育研究会、公立学校教頭会……各十五万円

地域活性化活動奨励事業

活動内容
地域社会の未来にビジョンを描いて地域の活性化を図る活動

助成対象
趣旨に適合した一般団体、生涯学習関係の諸団体、幼稚園、保育園、こども園、小学校、中学校、高等学校及びそれらのＰＴＡ、大学等

助成金額
一件あたり　五万円以内

地域活動振興助成事業

活動内容
支部組織・機構整備充実活動、教育世論を喚起・結集する活動、教育に関する県民の意識を高揚する活動、環境整備・青少年の健全育成活動

助成対象
教育会支部（支部長が推薦する団体を含む）

助成金額
活動内容等によって決定

モデル地区・支部指定事業

活動内容
地区・支部の特性や課題を踏まえ、教育会活動の目標に沿った創意ある事業活動の開拓とその計画的、継続的推進

助成対象
地区・支部

助成方法
地区・支部の活動費を会費の五割に増額する。（継続は四割）